

まめほん 豆本を作ろう！

5月11日(日) 午前10時～

図書館お話し室

対象:小学生以上

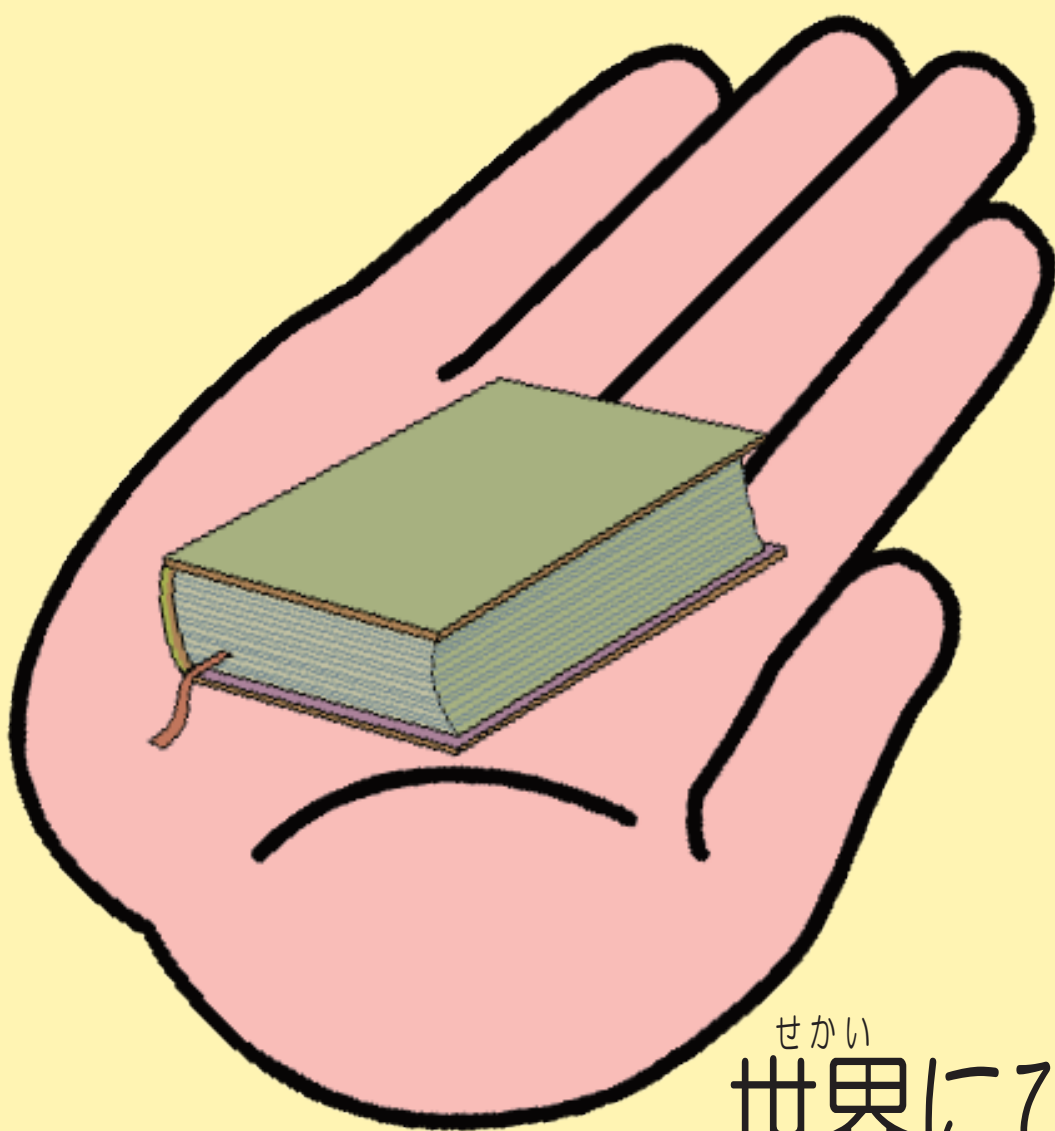
小学生より小さいお子様が参加される場合は保護者の方も一緒にご参加ください

定員:10名

募集開始:4月26日(土) 午前9時～

久世図書館窓口または下記の電話番号にお申込ください

真庭市立久世図書館 TEL 0867-42-7203



豆本とは

きわめて小型に製作された本で、英語のmidget book, miniature bookにあたるが、bibelor, bijou book, dwarf book, liliput editionなど多くの愛称がある。愛書趣味的な本が多い。日本でも〈豆本〉のほか中国渡来の巾箱本、袖珍本、寸珍本などの呼称があり、江戸時代の雛本、芥子本などの称がある。どれほどの大きさのものを指すかについてはかなり幅があり(中略)西洋では天地が10cm以下のものをいう。

西洋で早い例としては、イギリスのアン女王(18世紀)は人形の家には200冊の豆本を並べていた。このころすでにクルミの殻に収まる聖書が印刷されている。中国では南齊の衡陽王(6世紀)は蚕頭大の文字で書いた五経を持っていたという。印刷では南宋のころ(12世紀)に、五経や学典類を天地13cmの本に印刷し、これを巾箱本といった。(中略)日本では、江戸時代、18世紀初めから豆本を印刷しており、ことに文化・文政(1804-30)のころに盛んであった。《寸珍源氏物語》(文政末)は4cm×3cmに五十四帖全部を収めた。明治に入ってから、銅版や石版の絵本の豆本が盛んに作られ、西洋式装丁のものでは昭和初期に《ルビー双書》(吉屋信子監修, 万有社)は革装の良いできばえであった。第2次世界大戦後、豆本製作が盛んになって《えぞまめ本》(1953)をはじめ地方色豊かな豆本も各地で作られるようになった。また、武井武雄刊行書、棟方志功の版画豆本などはその独自性で知られている。東京の《こつう豆本》は充実した内容、凝った装丁で知られる。

〈世界大百科事典(平凡社)より〉

世界にひとつ！

あなただけの豆本を作ってみませんか。

主催：真庭市立久世図書館